

ちい 小さな谷川の底を写した二枚の青い幻燈*です。
いち、五月
二匹のかにの子どもらが青じろい水の底で話して
ました。

「クラムボンはわらったよ。」 「クラムボンはかふか
ぶわらったよ。」 「クラムボンははねてわらった

よ。」 「クラムボンはかふかぶわらったよ。」

上の方や横の方は、青くくらく鋼* *のように見え
ます。そのなめらかな天井を、つぶつぶ暗い泡が流れ
て行きます。

「クラムボンはわらっていたよ。」 「クラムボンはか
ふかぶわらったよ。」 「それならなぜクラムボンはわ
らったの。」 「知らない。」

つぶつぶ泡が流れて行きます。かにの子どもらもぼ
つぶつぶとつづけて五、六粒泡をはきました。それ
はゆれながら①水銀* * *のように光ってななめに上
の方へのぼって行きました。

つうと銀のいろの腹をひるがえして、一匹の魚が頭
の上を過ぎて行きました。

「クラムボンは死んだよ。」 「クラムボンは殺された
よ。」 「クラムボンは死んでしまったよ……。」 「殺
されたよ。」 「それならなぜ殺された。」 「兄さんのか
には、その右側の四本の足の中の二本を、弟の平べつ
たい頭にのせながら言いました。」 「わからない。」
魚がまたツウともどつて下流の方へ行きました。
「クラムボンはわらったよ。」 「わらった。」

ことば * 幻燈：光を使い、絵や写真を幕などに映して見せるもの。

* * 鋼：鉄をもとに作る、かたい金属。

* * * 水銀：ふだんの温度では液体になっている、銀色の金属。

にわかにはパツと明るくなり、日光の黄金は夢のように水の中にふつて来ました。

②波から来る光の網が、底の白い岩の上で美しくゆらゆらのびたりちぢんだりしました。泡や小さなごみからはまっすぐな影の棒が、ななめに水の中に並んで立ちました。

魚がこんどはそこら中の黄金の光をまるつきりくちやくちやにして、おまけに自分は鉄いろに変に底ばかりして、また上流の方へのぼりました。

「お魚はなぜああ行ったり来たりするの。」弟のかにがまぶしそうに目を動かしながらたずねました。

「何か悪いことをしてるんだよ、とってるんだよ。」

「とってるの。」「うん。」

そのお魚がまた上流からもどつて来ました。③今度はゆつくり落ちついて、ひれも尾も動かさずただ水にだけ流されながら、お口を輪のように丸くしてやって来ました。その影は黒くしずかに底の光の網の上をすべりました。

「お魚は……。」

もんいち
問一

①は、泡のどんな様子を表していますか。最も適切なものを選びましょう。

ア 暗い色の泡が、ゆれずに流れる様子。

イ 銀色にきらめく泡が、ゆれながらのぼる様子。

ウ 黄金色の泡が、岩の上でのび縮みする様子。

エ 黒い泡が、影を動かしながら沈む様子。

こたえ

もんに
問二

②では、何が、どこで、どのように見えていますか。

「光の網」の意味が分かるように、五十字以内で説明しましょう。

もんさん
問三

③の「今度」の魚と、その前の魚の動きを比べた説明として、最も適切なものを選びましょう。

ア 前は上流へ進み、今度はひれや尾を動かさず流れに運ばれている。

イ 前は下流へ進み、今度はひれや尾を動かして上流へ進んでいる。

ウ 前は水の底に止まり、今度はひれや尾を動かして下流へ進んでいる。

エ 前は上流へ進み、今度はひれや尾を止めて同じ場所にとどまっている。

こたえ

その時^{とき}です。にわか^{てんじょう}に天井^{しろう}に白い泡^{あわ}がたつて、①青^{あお}び
かりのまるでぎらぎらする鉄砲玉^{てつぽうだま}のようなものが、いき
なり飛^とびこんで来^きました。

兄^{にい}さんのかには、はつきりとその青^{あお}いもののさきがコン
パスのように黒^{くろ}くとかっているのも見^みました。と思^{おも}う
ちに、魚^{さかな}の白^{しろ}い腹^{はら}がぎらっと光^{ひか}って一^{ひと}ぺんひるがえり、
上^{うへ}の方^{ほう}へのぼったようでしたが、それっきりもう青^{あお}いも
のも魚^{さかな}の形^{かたち}も見^みえず、光^{ひかり}の黄金^{きん}の網^{あみ}はゆらゆらゆれ、泡^{あわ}
はつぶつぶ流^{なが}れました。

二^に匹^{ひき}はまるで声^{こえ}も出^でず、いすくまって*しまいまし
た。お父^{とう}さんのかにが出^でて来^きました。

「どうしたい。ぶるぶるふるえているじゃないか。」

「お父^{とう}さん、いまおかしなものが来^きたよ。」「どんなも
んだ。」「青^{あお}くてね、光^{ひか}るんだよ。はじがこんなに黒^{くろ}く
とがってるの。それが来^きたらお魚^{さかな}が上^{うへ}へのぼって行^いった
よ。」「そいつの目^めが赤^{あか}かったかい。」「わからな
い。」

ことば * いすくまる：おそれなどで、体^{からだ}を動^{うご}かせなくなる。

「ふうん。しかし、そいつは鳥だよ。かわせみと言うんだ。大丈夫だ、安心しろ。おれたちはかまわないんだから。」お父さん、お魚はどこへ行ったの。「魚かい。魚はこわい所へ行った」「こわいよ、お父さん。」「いいいい、大丈夫だ。心配するな。②そら、かば＊＊の花が流れて来た。ごらん、きれいだろう。」泡といっしょに、白いかばの花びらが天井をたくさんすべって来ました。「こわいよ、お父さん。」弟のかにも言いました。

光の網はゆらゆら、のびたりちぢんだり、③花びらの影はしずかに砂をすべりました。

ことば ＊＊ かば：木の仲間の名前。ここでは、その花が流れて来ている。

もんいち
問一

①を、初めから「かわせみ」と書かずにこのように描く効果として、最も適切なものを選びましょう。
ア 子供らが、正体を知っている鳥の動きを落ち着いて見ていると伝わる。
イ 父親が、青いものの正体を子供らに説明していると伝わる。
ウ 魚が、青いものの姿を見て先に逃げ出したと伝わる。
エ 子供らには、正体の分からないものが勢いよく現れたと伝わる。

こたえ

もんに
問二

②で父親は子供らをどうしようと思いましたか。そのあとの弟の様子も含め、六十字以内で説明しましょう。

もんさん
問三

③は、どのように動いていましたか。最後の一文から、その動きを表す部分を抜き出しましょう。句点は書きません。

二、十二月

かにの子どもらはもうよほど大きくなり、底の景色も

夏から秋の間にすっかり変わりました。

白いやわらかな丸石もころがって来、小さなきり*の形の水晶の粒や、金雲母**のかけらも流れて来てとまりました。

そのつめたい水の底まで、ラムネのびんの月光がいっぱいにすきとおり、天井では波が青じろい火を、もやしたり消したりしているよう、①あたりはしんとして、ただいかに遠くからというように、その波の音がひびいて来るだけです。

かにの子どもらは、あんまり月が明るく水がきれいなので、ねむらないで外に出て、しばらくだまって泡をはいて天上の方を見ていました。

ことば * きり：木などに小さな穴をあける、先のとがった道具。

** 金雲母：黄褐色などをした、うすくはがれる鉱物。

「やっぱりぼくの泡は大きいね。」「兄さん、わざと大きくはいてるんだい。ぼくだってわざとならもつと大きくはけるよ。」

「はいてごらん。おや、たったそれきりだろう。いいかい、兄さんがはくから見ておいで。そら、ね、大きいだろう。」②「②大きないや、おんなじだい。」

「近くだから自分のが大きく見えるんだよ。③そんならいっしょにはいてみよう。いいかい、そら。」「やっぱりぼくの方大きいよ。」「本当かい。じゃ、も一つはくよ。」「だめだい、そんなにのびあがっては。」

またお父さんのかにが出て来ました。

「もうねろねろ。おそいぞ、あしたイサド***へ連れて行かんぞ。」「お父さん、ぼくたちの泡どっち大きいの」「それは兄さんの方だろう」「そうじゃないよ、ぼくの方大きいんだよ」弟のかには泣きそうになりました。

ことば *** イサド：親子が出かける先の名前。どんな場所かは本文に説明がない。

もんいち
問一

―①に続く波の音の描写は、あたりのどんな様子を伝えてい
ますか。最も適切なものを選びましょう。
ア 波の音が近づき、かにたちが落ち着かない様子。
イ 波の音が消え、かにの声だけがよくひびく様子。
ウ 遠くからのような波の音だけがひびく、静かな様子。
エ 波の音が大きく、かにの声が聞こえない様子。

こたえ

もんに
問二

―②には弟のどんな気持ち
があらわ
表れていますか。前後の弟の
ことば
言葉を一つ取り上げ、その
ことば
言葉から分かる気持ちを
ろくじゅうじいない
六十字以内で書きましょう。

もんさん
問三

―③で兄がいつしよに泡をはこうとした理由として、最も
適切なものを選びましょう。
ア 父親に、どちらの泡が大きいか決めてもらうため。
イ 近い自分の泡が大きく見えるといい、同時にはいて比べ
るため。
ウ 弟に、泡を大きくするにはのびあがればよいと教えるた
め。
エ 二つの泡を合わせ、一つの大きな泡にするため。

こたえ

そのとき、トブン。
黒い丸い大きなものが、天井から落ちてずうつとしずんで、また上へのぼって行きました。キラキラッと黄金のぶちが光りました。
「かわせみだ」子どもらのかには首をすくめて言いました。
お父さんのかには、遠めがねのような両方の目をあらん限りのぼして、①よくよく見てから言いました。
「そうじゃない、あれはやまなし*だ、流れて行くぞ、ついて行つて見よう、ああいいにおいだな」
なるほど、そこらの月あかりの水の中は、やまなしのいいにおいでいっぱいでした。
三匹はぼかぼか流れて行くやまなしのあとを追いました。その横歩きと、底の黒い三つの影法師**が、②合わせて六つおどるようにして、やまなしの丸い影を追いました。

ことば * やまなし：山などに生えるなしの木。ここでは、その実。
** 影法師：光が当たってできる姿の影。ここでは、かしの影。

間もなく水はサラサラ鳴り、天井の波はいよいよ青いほのおをあげ、やまなしは横になつて木の枝にひつかかつてとまり、その上には月光の虹がもかもか集まりました。

「どうだ、やっぱりやまなしだよ、よく熟している、いいにおいだろう。」③おいしそうだね、お父さん
「待て待て、もう二日ばかり待つとね、こいつは下へしずんで来る、それからひとりでおいしいお酒ができるから、さあ、もう帰つてねよう、おいで」
親子のかには三匹、自分らの穴に帰って行きます。
波はいよいよ青じろいほのおをゆらゆらとあげました。
それはまた金剛石***の粉をはいているようでした。
私の幻燈はこれでおしまいであります。

ことば *** 金剛石：ダイヤモンド。

もんいち
問一

①の父親と、その前の子供らの違いとして、最も適切なものを選びましょう。

ア 父親はかわせみだと考え、子供らがにおいからやまなしだと確かめた。

イ 父親は子供らの判断を信じ、見ずにやまなしのあとを追った。

ウ 父親も子供らも、何か分からないまま、そのあとを追った。

エ 子供らはかわせみだと思い、父親はよく見てやまなしだと確かめた。

こたえ

もんに
問二

②は何と何を合わせた数ですか。それぞれの数も入れて、短く書きましょう。

もんさん
問三

③の子供らは、初めは首をすくめていました。なぜ、やまなしを追うようになったと考えられますか。父親の説明と実の様子をもとに、六十字以内で書きましょう。

問3

正解：ア

本文のどこを見るか

前の「また上流の方へのぼりました」と、「ひれも尾も動かさずただ水にだけ流されながら」。

考え方

前後の動きを比較します。ひれや尾が止まっていますが、魚自体は流れに運ばれています。

誤答の理由

イ：今度はひれや尾を動かしていません。

ウ：前は底に止まらず、上流へのぼっています。

エ：同じ場所にとどまっています。

問2

解答例：日光が、底の白い岩の上で網のような模様になり、ゆれたりのび縮みしたりして見えている。

本文のどこを見るか

直前の「日光の黄金」と、傍線②。

考え方

本物の網ではなく、光の模様です。何が、どこで、どう見えるかを結びます。

採点ポイント

① 日光（光）が、底の岩の上に網のような模様を作る。

② その模様がゆれたり、のび縮みしたりする。
二点で正解。水面の波にふれても構いません。本物の網とした場合は、たとえの理解を確かめます。

問1

正解：イ

本文のどこを見るか

「ゆれながら」「水銀のように光って」「上の方へ」。

考え方

銀色の光り方を水銀にたとえています。動く向きも確認します。

誤答の理由

ア：ゆれながらのぼっています。

ウ：黄金やのび縮みは、後の光の網の描写です。

エ：黒く沈む様子ではありません。

問3

正解：しずかに砂をすべりました

本文のどこを見るか

最後の一文の「花びらの影は」に続く部分。

考え方

何の動きかを確認し、主語に続く述語部分を抜き出します。怖がる子供らのそばで、静かな景色が描かれています。

採点ポイント

本文どおりに抜き出していれば正解。「ゆらゆら、のびたりちぢんだり」は光の網の動きです。「砂をすべりました」だけなら、「しずかに」も確かめま

す。

問2

解答例：父親はきれいな花を見せて安心させようとしたが、弟はまだ「こわいよ」と言い、怖がっている。

本文のどこを見るか

「大丈夫だ。心配するな」と、花が流れてきたあとの弟の言葉。

考え方

働きかけの目的と、実際の反応を分けて読みます。父親の願いが、そのまま実現したわけではありません。

採点ポイント

① 花を見せて安心させようとした。

② 弟にはまだ怖さが残っている。

二点で正解。「怖さを和らげようとした」「落ち着かせようとした」も可。弟の言葉は引用せず説明しても認めます。

問1

正解：エ

本文のどこを見るか

傍線①と「いきなり」、子供の「おかしなもの」。

考え方

子供らに見えた色・形・勢いから描き、正体は後で父親が説明します。

誤答の理由

ア：正体を知らず、声も出なくなります。

イ：父親が出てくる前の描写です。

ウ：魚が先に逃げたとは書かれていません。

問3

正解：イ

本文のどこを見るか

直前の「近くだから自分のが大きく見えるんだよ」。

考え方

「そんなら」が前の説明を受け、同時に比べる提案につながっています。同時なら科学的に公平と断定する問題ではありません。

誤答の理由

ア：この提案の時には父親は出てきていません。

ウ：のびあがる話は、この後の弟の発言です。

エ：二つの泡を一つにする話ではありません。

問2

解答例：「ぼくだってわざとならもっと大きくはけるよ」と言うように、泡の大きさに負けたくない気持ち。

本文のどこを見るか

「ぼくだって」「やっぱりぼくの方大きいよ」など。

考え方

一つの発言だけでなく、言い張るやり取りから、兄に負けたくない気持ちを読みます。

採点ポイント

- ① 前後の弟の発言を一つ取り上げる。
- ② 負けたくない、自分の方が大きいと認めてほしい気持ちを説明する。
「やっぱりぼくの方大きいよ」を根拠にしても可。
「悔しい」だけなら何についてか補います。

問1

正解：ウ

本文のどこを見るか

「ただ」「遠くからというように」「波の音がひびいて来るだけ」。

考え方

音が書かれていても、にぎやかな場面とは限りません。聞こえる音の限られ方から静けさを捉えます。

誤答の理由

ア：音が近づいているとは書かれていません。

イ：波の音は消えています。

エ：波の音が声をかき消す描写はありません。

問3

解答例：父親の説明でかわせみではなくやまなしだと分かり、よいにおいのする実にはかれたから。

本文のどこを見るか

父親の説明、「いいにおいでいっぱい」、あとを追う行動。

考え方

首をすくめた時と、実を追う時の間に何があったかを読みます。「おいしそう」は、その後の関心を確認する言葉です。

採点ポイント

- ① 父親の説明で、かわせみではなくやまなしと分かった。
- ② よいにおいのする実に関心を持った。
二点で正解。「安心して、いいにおいの実についていきたくなった」も可。後で聞く酒の話だけを理由にしません。

問2

解答例：三匹のかにと、その三つの影。

本文のどこを見るか

「三匹」と「底の黒い三つの影法師」。

考え方

かにが六匹いるのではなく、体と影を合わせて六つです。短答なので、長い説明は必要ありません。

採点ポイント

三匹のかに・三つの影の二点。数字で書いても可。
「三匹の親子と三つの影」も認めます。やまなしの丸い影は数に含みません。

問1

正解：エ

本文のどこを見るか

「かわせみだ」と、父親の「よくよく見てから」「そうじゃない」。

考え方

子供らの第一印象と、父親が観察して確かめたことを区別します。

誤答の理由

- ア：判断する人物が逆です。
イ：父親は見て確かめ、子供らの判断を否定しています。
ウ：父親はやまなしだと分かっています。

使い方・出典・教材制作

やまなし／小学5・6年生向け

印刷と使い方

全17ページ。児童用は1～12ページ、解答・解説は13～16ページ、使い方・出典は17ページです。各回は本文2ページと問題1ページです。A4横向き・片面・実際のサイズ（100%）で印刷します。本文を読む順に上へ並べ、問題をその下に置きます。

問題と採点

各回3問、記述は各回1問です。全体で選択6問・抜き出し1問・短答1問・記述4問。その回の本文を見ながら解いて構いません。記述は50～60字以内。句読点やかぎ括弧も一字に数えます。必要な内容があれば、上限まで書く必要はありません。解答例と表現が違っていても採点ポイントを満たせば認めます。

作品の読み方

色や光のたとえに加え、音の描写、会話の応酬、父親の働きかけと子供の反応、行動の変化を読みます。本文に書かれたことと、そこから考えたことを区別します。「クラムボン」の正体や「イサド」がどんな場所かは、本文だけで一つに決めず、正解として求めません。

本文の扱い

提供された青空文庫本文をもとに、現代表記・一部語句・句読点・段落を整え、ふりがなと注釈を加えました。「蟹」を「かに」、「疋」を「匹」などとしています。会話と情景描写を残し、五月・十二月を各2回に分割しました。傍線と設問は教材用です。

作者・作品

作品：『やまなし』
作者：宮沢賢治
初出：「岩手毎日新聞」岩手毎日新聞社
1923（大正12）年4月8日

出典情報

底本：『新編風の又三郎』新潮文庫、新潮社
1989（平成元）年2月25日発行
1989（平成元）年6月10日2刷
入力：蔣龍
校正：noriko saito
2008年4月15日作成
2013年7月8日修正

出典の確認先

青空文庫
<https://www.aozora.gr.jp/>
本文と書誌・入力校正情報は、ご提供の青空文庫作成ファイルに基づきます。入力・校正・制作は、ボランティアの皆さんによるものです。

教材制作

家スタ！／学習舎シオン